

学位授与番号：乙 3241 号

氏 名：永田 拓也

学位の種類：博士（医学）

学位授与日付：平成 31 年 2 月 27 日

学位論文名：

A cross-sectional survey on smoking cessation counseling for primary care.
(プライマリ・ケア外来での禁煙診療に関する横断研究)

学位論文審査委員長：教授 本郷賢一

学位論文審査委員：教授 木村直史 教授 宇都宮一典

論文要旨

氏名	永田 拓也	指導教授名	松島 雅人
<p>主論文</p> <p>A cross-sectional survey on smoking cessation counseling for primary care (プライマリ・ケア外来での禁煙診療に関する横断研究)</p> <p>Takuya Nagata, Masato Matsushima, Tomokazu Tominaga, Takamasa Watanabe, Yasuki Fujinuma.</p> <p>Jikeikai Medical Journal. 2017; 64 (4).</p> <p>【背景・目的】</p> <p>慢性疾患喫煙患者とその主治医を対象とした喫煙診療の実態、そして主治医が推測する SOBC (stage of behavioral change: 以下 SOBC) の正確性についてはあまり知られていない。本研究は入口調査によって、喫煙問題への介入状況および患者と主治医の間の SOBC の一致について調査した。</p> <p>【方法】</p> <p>都市部プライマリ・ケア診療所 10 施設を受診し、同意が得られた患者とその主治医を対象に自記式質問表を用いた横断研究を行った。診療の前に患者とその主治医に自記式質問紙票を配布した。主要測定項目として、患者報告の SOBC と、主治医報告の SOBC と、主治医による禁煙治療の勧奨の有無について測定した。</p> <p>【結果】</p> <p>1260 人が研究に登録され、主治医、PC-SRCD (primary care smoking-related chronic disease: 以下 PC-SRCD) 喫煙患者双方から自記式質問紙データを取得できたのは 87 組であった。主治医は準備期の PC-SRCD 喫煙患者の 60.0% に禁煙外来を勧奨していなかった。患者報告の SOBC と主治医推測の SOBC の一致度は低かった(重み付け κ 値 0.21; 95%CI: 0.03-0.39)。主治医による SOBC の過大評価(6.9%)に比べ過小評価(26.4%)を多く認め、過小評価の割合は、ニコチン依存度(TDS)が高い程、高くなった(OR 1.26, 95% CI: 1.03-1.54)。そして、主治医が推測した SOBC と、主治医が報告した禁煙外来の勧奨の有無の割合に有意な傾向は認められなかった($P=0.93$)。</p> <p>【結論】</p> <p>主治医が推測した SOBC と、PC-SRCD を有する患者が報告した SOBC の一致度は低かった。主治医による SOBC の過小評価は、過大評価よりも頻繁に発生し、TDS と有意な関連を認めた。さらに、主治医は推測した SOBC に応じた介入を実施していない可能性があり、禁煙外来は準備期の患者の半数以上に勧奨されていなかった。これらの結果は、5A アプローチの Assess と Assist の観点から、日常診療の合間の禁煙サポートは不十分であることを示唆している。</p>			

論文審査結果の要旨

永田拓也氏の学位申請論文は主論文 1 編と参考論文 2 編よりなり、主論文のタイトルは「A cross-sectional survey on smoking cessation counseling for primary care」、日本語では「プライマリ・ケア外来での禁煙診療に関する横断的研究」と題され、2017 年に Jikeikai Medical Journal 誌に発表された。指導教官は、臨床疫学研究部の松島雅人教授である。

平成 31 年 2 月 6 日、宇都宮一典教授、木村直史教授、松島雅人教授ご臨席のもと公開学位審査会が開催された。永田氏による研究内容発表に続いて質疑応答が行われ、以下の質問があった。

- 1) 主治医判定による禁煙勧奨が無関心期約 50%、関心期約 60%であるのに対して、準備期が約 30%と低下してしまう理由は何か？
- 2) 起床後から初めて喫煙するまでの時間は考慮しているのか？
- 3) 主治医の診察回数により結果は影響を受けないのか？
- 4) 行動変容は、一定の介入による変化を見るものとするが、今回の研究では介入後の変化は見えていないのか？
- 5) 今回使用した質問表の妥当性は？
- 6) ニコチン依存度が高い患者は過大評価をする傾向にあると思われるが、それが医師による過小評価に繋がっているのではないか？

永田氏はこれらの全ての質問に対して的確に回答し、大変有用な議論がなされた。その後、宇都宮教授、木村教授と慎重に審議した結果、本研究はプライマリ・ケア外来において、禁煙の重要性が高い疾患を有する患者に対し、患者自身と主治医の考える行動変容に隔たりがあり、これが禁煙勧奨を含めた適切な禁煙指導に繋がっていない可能性を示したものであり、今後のプライマリ・ケア医の取り組みを検討する上で大変意義がある研究であることより、学位を授与するに十分な価値があると判断した。

尚、Thesis の修正・再提出が必要であり、再提出された Thesis が適切に修正されていることを確認いたしました。